



Hostelling Magazine

“Life is a gamble!”

しないことをしてみる勇気が、
人生を変える。

写真家

LESLIE KEE

Hostelling Magazine 地球の歩き方 www.traveltips.com

ベストシーズン到来!夏のケープ半島でアクティビティ三昧

ケープタウン / 喜望峰 / ワインランド (南アフリカ)

◎◎トリップアドバイザー

viator

ケープタウンの人気ポートツアー

ケープタウンツアー特集

Youth Hostel Pick up

温かい人と自然がもてなす、

ぬくもり溢れる場所

犬山国際ユースホステル

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





www.yamazakipan.co.jp

おいしいから、
いつでも一緒。



ランチパック

公式webサイト

ランチパック 検索

公式Facebookページ
www.facebook.com/lunchpack.jp

スマートフォン用アプリ **ランチパックCLUB** 検索
[Google Play] [App Store] からダウンロード

YOU WON'T GET
CLOSER
THAN THIS



Explore more at
24hoursofwow.southafrica.net

#WowSouthAfrica



Inspiring new ways



Vision

Principle and Philosophy

Inclusivity

世界を超えて

Learning and Understanding

考えよう

Sustainability

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本紙の情報は2016年12月20日現在のもので、変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。
 発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会
 編集・発行人 水野 幸
 TEL.(03)5738-0546
 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
 国立オリンピック記念青少年総合センター内
 ※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
 制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

Line up

インタビュー P02

写真家/LESLIE KEE

“Life is a gamble!”

しないことをしてみる勇気が、
人生を変える。

Youth Hostel Pick up P08

温かい人と自然がもてなす、
ぬくもり溢れる場所
犬山国際ユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12

ベストシーズン到来!

夏のケープ半島でアクティビティ三昧
南アフリカ

■南アフリカって、実はこんなトコ

トリップアドバイザー & Viator P16

耳寄り! 観光NAVI

ケープタウンの人気ボートツアー
ケープタウンツアー特集

「お気に入りジャパン」..... P18

Instagramコンテスト

gtg P20

教えて! 旅GIRL P21

Event Information P22

“Life is a gamble!”

しないことをしてみる勇気が、
人生を変える。

写真家
LESLIE KEE

業界の第一線を走り続ける、シンガポール出身の人気写真家レスリー・キーさん。1998年に写真家としてデビューして以来、ファッション写真や広告写真を中心に、国内外で活動の幅を広げ続けています。レディー・ガガや松任谷由実、浜崎あゆみなど、これまで撮影してきた著名人のポートレートは数知れず。そんなレスリーさんが、初めてカメラを手にしたきっかけとは。なぜ、日本にやってきたのか。写真を撮るときに、大切にしている「信念」とは。詳しく話を伺ってみました。

13歳の眼前に突きつけられた、 「人は死ぬ」という事実。

Q. 広告業界やファッション業界で引っ張りだこのレスリーさんですが、写真家として大切にしている「スタンス」のようなものはありますか？

私は毎日、「やるべきことをやっているのかどうか」を考えているよ。私が撮りたいのは、被写体の何なのか。限られた撮影時間の中で、残された最後の瞬間まで、「勝負」をしている。

「あなたは叶えたい目標に向かって、本当に100%の力を出し切れていますか？ 0.1%でも諦めていることはないですか？」。私の弟子や、一緒に仕事をするヘアメイクさん、スタイリストさんには、よくこんな質問をするよ。残り0.1%に踏みこめば、その人の人生が変わる可能性がある。でも、ほとんどの人は、99.9%で満足してしまって、0.1%に踏み込めない。その0.1%に、目指したい目標の「金メダル」や「Final destination (最終目的地)」があるのかもしれないのね。

例えば、写真家にとっての「金メダル」とは何だと思う？ 答えは、人によってそれぞれ。「木村伊兵衛写真賞^(*)」を獲ったら」という人もいるだろうし、「雑誌『VOGUE』の表紙を撮ったら」「有名広告のコマーシャルフォトを撮ったら」「自分の手がけた写真集が売れたら」という人もいる。金メダルの形は、その人自身が自由に決めていい。でも、同じ夢を見ている人がたくさんいる中で、金メダルに届く人と届かない人がいるのはなぜか。タイミング？ それとも、運？ 努力？ 私は、その答えが最後の0.1%にあると思っているよ。

※木村伊兵衛写真賞……朝日新聞社主催による写真の賞。「写真界の芥川賞」と呼ばれることもある。

Q. 「0.1%にまで踏み込んでいく」という想いは、いつから、
どんなきっかけで抱くようになったのですか？

13歳のときに、女手ひとつで私や家族を養ってくれていたお母さんが、病院で亡くなる姿を見たことがきっかけだと思う。お母さんが亡くなったのは、1984年の8月。当時、私は中学1年生だった。学校の全校集会で校長先生の話をしている途中で突然名前を呼ばれて、「すぐに職員室に来なさい」と言われて。そしたら、「あなたのお母さんが倒れたらしい。おばあちゃんが迎えに来るから、すぐに病院へ行きなさい」と、先生に言われて……。すぐに病院に向かったけれど、病室で見たお母さんの顔は真っ白だった。診断結果は「癌」。実はその頃、お母さんはいつも咳をしていた。でも、それ以外の症状がなかったから、13歳の私はお母さんがそんな重い病気を抱えていたなんて知らなかったんだよ。気づいてあげられなくて、本当に悔しかった。我が家は貧しかったから、最低限の治療しかできなくて、お母さんは入院した5日後に亡くなってしまった。一番大切な人が目の前で亡くなったときに、私が気づいた

世界中のアーティストと撮影終了後に撮ったツーショット写真。幼少時代から音楽が大好きで、写真家になった今もファンだった頃の気持ちは変わらない。

こと。それは、「人間は本当に死ぬんだ」ということ。それだけは、何があっても間違いのない事実なのだと、嫌でも受け止めるしかなかった。この出来事が、私に生命の大切さを教えてくれたよ。そして、1分1秒を無駄にせず、100%の力を出そうという強い意志を持つきっかけにもなったと思う。

一歩先に行くカルチャーに憧れ、日本へ。

Q. そもそもレスリーさんが写真を撮るようになったきっかけは何だったのでしょうか？

妹や友達の写真を撮ってあげたいなあと思ったのが、写真に興味を持ったきっかけ。学校には、私の家族のように貧しい友達何人かいて。家族で旅行をしたことがなかったり、誕生日のお祝いもしてもらえなかったり……。だから、私たち家族や彼らには、自分の思い出の写真がないんだよ。それで、私の13歳の誕生日に、お母さんに「カメラがほしい」とお願いしたら、買ってもらえて。それからだね、ポートレート(肖像写真)を撮るようになったのは。

Q. 現在は日本を拠点に世界中で活躍されていますが、シンガポールで生まれ育ったレスリーさんが、日本で写真家として活動しようと思ったのはなぜですか？

日本に対してずっと憧れがあったからだよ。母が亡くなった後、私が中学校を辞めてすぐに働き始めたのが、たまたま日系の工場。私にとって、そこはまるで「ワンダーランド」のような場所だった。工場の外にはないものがあつたんだよね。工場には日本のレコードや雑誌がたくさんあって、テレビをつければ、NHKの番組がずっと流れていた。体操番組も、ドラマもアニメも、シンガポールのテレビ番組とは、クオリティの高さが全然違った。

働き始めた頃は、私にとって日本は遠い遠い存在だった。でも、働きながら日本のカルチャーに触れるうちに、「日本に行ってみよう」という気持ちがどんどん強くなっていった。特に大好きだったのは、日本のファッション誌や音楽誌。表紙の写真を見ながら、「こんな写真を撮れるようになりたい」と思った。あの時の気持ちは、今も忘れていないよ。だから、私は今、関わった雑誌や広告、写真集が、誰かの人生を変えるかもしれないと思いながら、写真を撮っている。そして、当時憧れた写真家のみなさんに対して、手がけた作品を通して感謝を伝えていきたいという想いも、ずっと抱き続けているよ。



写真は誰かの「宝物」になるのだと気づいた、アジア諸国でのバックパッカー生活。

Q.レスリーさんは来日する前に、東南アジアを旅されていたそうですね

そうそう、28ヶ月間ね。19歳のときにシンガポールを出て、兵役で戻ってくるまではアジアで貧乏旅行をしていたよ。シンガポールからバスに乗って、まずはマレーシアへ。それからまたバスで何十時間もかけてタイに行って、インドネシア、フィリピン、インド、ネパール……エベレストにも2回行った!

Q. 28ヶ月!それはかなりの長期滞在ですね。特に印象に残っているのはどの国ですか?

私はインド映画が大好きだったから、やっぱりインドは面白かった。ガンジス川はスピリチュアル的というか、パワースポットのような場所だよ。1ヶ月くらい滞在するつもりが、1年も住んじゃった。日本人のバックパッカーもたくさんいた。みんな声を掛けてくれるから、友達もたくさんできたよ。現地で暮らしている人たちの写真もたくさん撮った。インドの人たちは、ほとんどカメラを持っていなかったから、フィルムカメラでポートレートを撮って、現像屋さんに行ってプリントした写真を彼らにプレゼントしたよ。みんなすごく喜んでくれた。そのときに分かったのは、「写真は誰かにとっての“宝物”にできるんだ」ということだね。この頃に撮った写真と今の写真を見比べると、あまり変わらないと思う。もちろん、昔と比べたら技術は上がっているけれど、子どもたちの表情とか、強い目線とか、昔の写真には、ヒントがいっぱいあるよ。

やらないことをやってみる。すると、新しい可能性が見えてくる。

Q.Hostelling Magazineの読者の中には、旅行先で現地の人々の写真を撮るのをためらってしまう人も多いんじゃないかと思っていて……どうやったら、その壁を破れるでしょうか?

それは、自分が無理をするしかないよ!「こういうことはやりたくない、したくない」みたいな、自分の中にあるルールとか、ポリシーとか、みんな持っているよね。でも、あえてしないことをすればいい。それがヒントになると思う。しないことをしてみたら、あなたが思ったほど辛くないかもしれない。思ったほど、嫌じゃないかもしれない。そこで、ひょっとしたらあなたの人生のもうひとつの扉が開いて、その先に長い道が待っているかもしれない。開けてみようよ、せっかくなんだから。ドアはひとつだけじゃないはずだよ。ドアを開けることによって、あなたの人生に必ずヒントが生まれるから。

日本人って、すごくシャイだよ。それと、教育が進んでいるからか、人に迷惑をかけないように一歩手前で止まって、考えてから進む。それは素晴らしいことでもあるけれど、一歩の踏み出し方を考え過ぎるせいで、次の瞬間にあるたくさんのチャンスを逃してしまうこともあると思う。例えば、道を歩いているときや、電車に乗っているとき。私は「この人を撮りたい!」と強く思ったら、全く知らない人でもすぐに声を掛けちゃうよ。知らない人に声を掛けるって、とってもハードルが高いけど。

私の場合は、「この人は私の可能性を広げてくれそうだな」と思ったら、自然現象のように「実はこういうことがやりたいんだよ!」とアピールするかな。“ダメもと”でも全然構わないんだよ。今は興味がなくても、しばらく経ってから興味を持ってもらえるかもしれないんだから。常に前向きに、プラス思考で考える!そうすれば、可能性はどんどん広がっていくんじゃないかな。

“Life is a gamble!”だよ。人生は、「賭ける」もの。自分を縛って壁をつくってしまうのは、もったいない。私は、みんなが興味のないものを拾って、それを何かに使おうとするタイプ。だって、誰からもやっちゃダメとは言われていないし、やったほうが良いとも言われていないことなら、自分次第で自由にできるでしょう?



2011年、東北地震と津波の被災者へのチャリティを目的として、TIFFANYとのコラボレーションで発売した、世界中の美しい女性達を200人集めた写真集「LOVE&HOPE」の写真展で。



1989年、18歳のときに初めてバックパッカーとして旅をしたインド・VARANASIでの一枚。この写真が、自分の人生を変えた。

情報は、自分の足で、 五感で、魂で手に入れる。

Q. 旅に出たときの経験は、今の経験に活かされていますか？

絶対つながっているよ!みんな、自分で足を運んで行かないとダメダメ!でも、今旅行に行ける人はいいよね。たくさんの情報があるから。私が旅をしたときは、情報源が2冊の本しかなかった。『ロンリープラネット』と『地球の歩き方』。私は『地球の歩き方』を選んだよ。日本人がつくっている旅行ガイドブックは大体外れがないと聞いたので。

今は「どこの宿がいいのか」「どこのレストランがいいのか」は口コミを見て選べるでしょ?当時はインターネットも携帯電話もまだまだ発達していなかったから、大変だった。でも、そのスリリングさがとっても楽しかった。自分の選んだものが成功でも失敗でも、自分の人生でしょ?情報は、自分で足を運んで、五感で、魂で、手に入れるものだと思う。今は何事も情報ありきで決めてしまいがちだけど、それが喜怒哀楽の幅を狭くしているかもしれない。実は、情報が少ない方が、可能性が深く、広がるかもしれないと思う。

そういえば、ユースホステルって世界にどれくらいあるの?

Q. 世界には4,000ヶ所以上、日本国内には約200ヶ所ありますよ。

そうなんだ。すぐ行ってみたい!きっと、ユースホステルには面白い人がたくさんいるんだろうね。このインタビューをご縁に、日本のユースホステルにもいつか行きたいな。

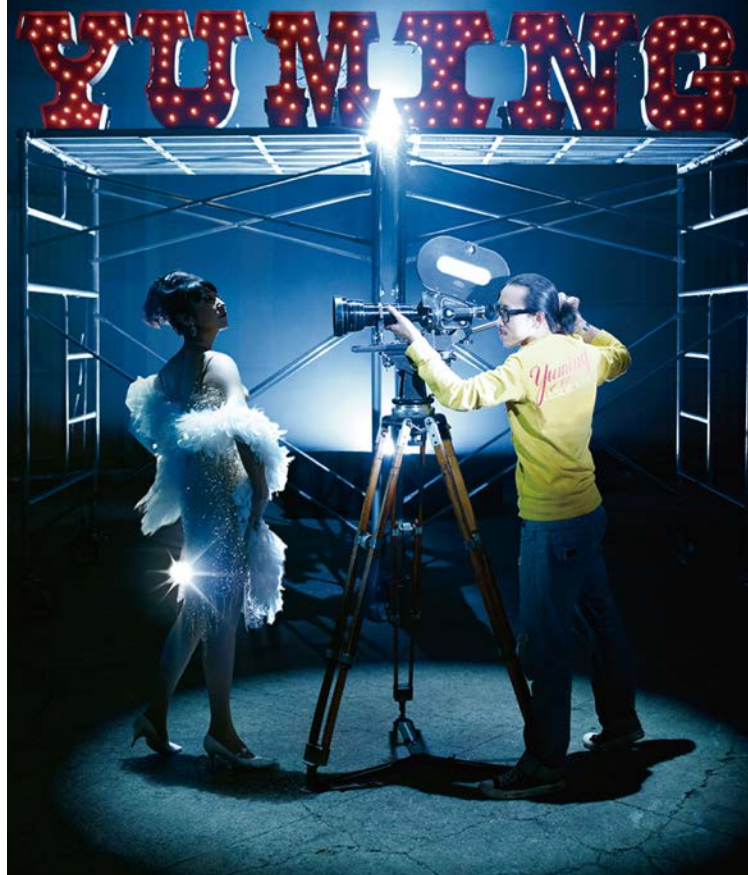
写真の力を信じて、どん欲に突き進む

Q. レスリーさんのお話を聞いていると、言葉の端々から底知れぬ「ハングリー精神」を感じます。

それはきっと、生まれ育った環境が恵まれていなかったから。恵まれていなければいけないほど、たくさんのハングリーさが出てくると思う。だって、衣食住に困ることって、日本にいたらほとんどないんじゃない?。困っていないなら、「そのままいいじゃん」と思うんじゃないかな。でも、困っている人の場合は、衣食住に困ったら自分で何とかしなきゃいけないと考えるから、何かを得るための行動力がすごいのかもかもしれない。

Q. 世界で活躍するときには、ライバルと戦っていかねばいけませんよね。

私は、あんまり「コンペディション(競争)」には興味がないんだよね。自分の写真には、絶対にオリジナリティや、ワンアンドオンリーなものがあると思うから、それを一生懸命信じて、自分のやりたいことを形にするためにもっとも腕やセンスを磨いて、前に進んで行けたらいいと思う。例えば双子だって、見た目はそっくりでも中身は違うんだから。写真の世界なんて、みんな他人なんだから、作品に共通点があったとしても、似ていないところの方がいっぱいある。私は負けず嫌いな性格だけど、周りの写真家にはリスペクトを持っているよ。それぞれが、悔いのないようにやればいいと思う。



Profile

LESLIE KEE

1971年シンガポール生まれ。1998年にフォトグラファーとしてデビューして以来、数多くのファッション誌や広告など国内外で活動。2004年に創刊した自費出版誌「SUPER」シリーズはYOJI YAMAMOTOやLADY GAGAとのコラボレーションで話題となっている。

SNS (Twitter, Facebook, Instagram: lesliekeesuper)

Official Website: lesliekee.com



「バランス」と「ディテール」に こだわり抜き、その人“らしさ”を切り取る。

Q. 今まで数多くの著名人を撮影してこられた中で、特に印象に残っている方はどなたですか？

たくさんいるけれど、一番はやっぱりユーミン(松任谷由実さん)かな。私にとって、ユーミンは神様。シンガポールの日系工場に働いていた頃、『やさしさに包まれたなら』を聴いて、歌詞の意味と一緒に働いていた日本人から教えてもらってから、今もずっと大好き。日本に行きたいと思ったのは、「いつかユーミンに会いたい、ユーミンの写真を撮りたい」という想いがあったからでもあるくらい、私に影響を与えてくれた存在だよ。

ご縁があって、29歳のときにユーミンの写真を撮らせてもらうチャンスもあって、それから今も彼女のCDのジャケットや写真集を、私が撮り続けていて。毎回ユーミンに会って話す度に、「奇跡がずっと続いているんだ」と感じるね。

Q. 松任谷由実さんの写真をはじめ、レスリーさんの作品は、どれもシンプルさの中に強いパワーを感じます。

私は写真を撮るときに、表情やジェスチャー、角度、姿勢の「バランス」をすごく考える。その人の顔の角度や髪の毛の流れる方、目の動き、指の動き、首の曲がり方。全部、ちょっと変えるだけでも写真は大きく変わる。たまに、そのバランスを調整しているときに、自分が「全体」をやっているような感覚になるよ。

それと、撮影する相手が何を考えているのか、「ディテール」を考えるのがすごく好き。だから、撮影相手が生まれてから今までの質問を、撮影中にたくさんする。「何がきっかけであなたは今の道を進んでいるの?」とか、「今までどんなつらいことがあったの?」とか、今私があなたにインタビューされているのと同じように、私も相手の話をたくさん聞いて、その人らしい瞬間を引き出しているよ。

Q. 2016年10月に、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、総勢200名もの「ポートレートメッセージ」を撮影するプロジェクトを行われたそうですね。

2020年東京オリンピック・パラリンピックで競技の主役になるのはアスリートかもしれないけれど、このプロジェクトの根底には、「多くの人の夢や目標を共有することで、よりよい未来をつくりたい」という思いがあって。このプロジェクトのために、著名人だけじゃなくて、10月9日、10日の2日間で一般の人の写真もたくさん撮ったよ。1人あたりの撮影にかけられる時間は短くても、その人の気持ちが写真に残って、「人生の一枚」になるように、心を込めて200名分のシャッターを切りました。もしもこの先、道に迷いそうになったら、自分が書いた夢や目標を思い出して、ふたたび走り出すきっかけにしてもらえたら嬉しいな。

Q. レスリーさんの今のご活躍を、お母さんがもしも見てくれているなら、どう思うでしょうね。

きっと、自慢してくれると思うよ!何もなかったところから、こうやって大きな仕事に関わらせてもらえるようになったんだから。お母さんが亡くなってから、もう32年。感謝の気持ちを伝えたくても、私には伝えられない。だから、もし、このインタビューを読んでいる皆さんが元気なら、親孝行をたくさんしてあげた方がいいよ!

Q. 強い意志で、夢を実現し続けてきたレスリーさんが、読者に伝えたいメッセージをお聞かせ下さい。

私が一番大好きなユーミンの『やさしさに包まれたなら』には、「目に映るすべてのことは メッセージ」という歌詞があるんだけど、まさにこの言葉を、インタビューを読んでいる若い子たちに伝えたい。あなたたちの目に映っているすべてには、「メッセージ」があるんだよ。それを、今、ちゃんと感じられていますか?もしも感じられていないなら、目を開いて、そして心を開いて、目の前に広がっているたくさんのヒントを見つけてください!

LESLIE KEE presents.

TOKYO 2020 Olympics Paralympics Special music clip

「⇒2020 レスリー・キーがつなぐポートレートメッセージ」 東京2020オリンピック・パラリンピック企画応援テーマソング 「やさしさに包まれたなら」

監督：LESLIE KEE

作曲・作詞：荒井由実 編曲：松任谷正隆 歌：松任谷由実

出演者：

AYABAMBI / 鈴木朋樹 / 片岡愛之助 / 黒木メイサ / 齋藤工 / 河瀬直美 / ジョン・カピラ / 篠原ともえ / 有森裕子 / 宮城大樹 / 福島リラ / GIMICO / 矢吹春奈 / 鈴木貴之 / 別所哲也 / 田中杏子 / 操上和美 / 草刈民代 / 中村獅童 / 水上剣星 / IVAN AKIRA / 宮本笑里 / ジャルジャル / 石田純一 / 西島敏博 / 湯川れい子 / 安藤政信 / 花岡伸和 / 太田光 / 山田裕貴 / JERO / 森本千絵 / 大西洋 / シシド・カフカ / LiLiCo / 小山薫堂 / 鈴木福 / 武部聡志 / パパイヤ鈴木 / 川中美幸 / 杏里 / 氷川きよし / 早見優 / 横野智章 / 美馬寛子 / 哀川翔 / 加藤雅也 / 上地雄輔 / 土屋アンナ / 茂木健一郎 / 藤あや子 / 梅宮アンナ / 村主章枝 / 壇蜜 / HIROYA / 大雅 / 藤原紀香 / 尾上松也 / 柚希礼音 / 岩城滉一 / 町田啓太 / すみれ / 森永邦彦 / 山根和馬 / 五木ひろし / 仲里依紗 / 桜庭ななみ / ヒロ杉山 / 箭内道彦 / 小池徹平 / 春畑道哉 / 今井マサキ / 加藤いつみ / 秋元梢 / 谷中敦 / 中川大志 / 隈研吾 / 平原綾香 / LESLIE KEE / 松任谷由実



「SUPER series」



Inspirations: LESLIE KEE at TEDxTokyo 2014

レスリー・キーさん 直筆サイン入り本

抽選で3名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの
専用申込みフォームから!
<http://www.jyh.or.jp/hm/>
■応募締切 2017年2月末日

※なお、当選発表は、商品の発送を以てかえさせていただきます。

